

# ピョートル・コンチャロフスキーについての覚書

前山 裕司

## はじめに

この紀要が刊行される頃には、受贈の手続きも完了し、新潟市美術館は日本の公立美術館でピョートル・コンチャロフスキーの絵画を3点所蔵する唯一の館となっているはずだ。

当館はすでにコンチャロフスキー《柳の風景》を昭和62年度に収蔵しており、今年度（令和6年度）、コンチャロフスキー2点とヴァシーリー・ボレーノフ1点の寄贈申請を受けたためである。

本論は、1920年代から50年代までの日本で、コンチャロフスキー作品を収集、所蔵し、展覧会などに出品していた人物たちについての覚書である。まず初めにロシアの画家ピョートル・ペトロヴィッチ・コンチャロフスキーについて簡単に述べておこう。

ピョートル・ペトロヴィッチ・コンチャロフスキー | Pyotr Petrovich Konchalovsky / Пётр Петрович Кончаловскийは1876年、ロシア帝国のスラヴァンスク、現在のウクライナ・ドネツィク州スロウヤーニシク | Славянск / Слов'янськ 郊外のイズユムスキー・ウイェズド | Изюмский уезд / Изюмський повітに生まれた。1889年、翻訳家で美術書の出版をしていた父親とともにモスクワに移る。この家は1890年代の美術動向の拠点となった。ギムナジウム時代にはモスクワ絵画彫刻建築学校に通い、1896～98年にはパリのアカデミー・ジュリアンで学んだ。モスクワに戻った後は「金羊毛展 | Золотое руно」、 「芸術世界展 | Мир искусства」などに出品。1909年、「ダイヤのジャック | Бубновый валет」の創設者の1人として、フォーヴィスムやキュビスム、プリミティヴィズムなどの表現を取り入れ、アヴァンギャルドの最先端で活躍した。妻オリガ・スリコヴァの父は、歴史画の巨匠ヴァシーリー・スリコフである。ピョートルとオリガの間には、息子の画家ミハイル・ペトロヴィッチ・コンチャロフスキー〔註1〕と、娘で詩人のナターリア・コンチャロフスカヤがいる。彼女と児童文学者・作詞家のセルゲイ・ミハルコフの間の2人の息子、アンドレイ・コンチャロフスキーとニキータ・ミハルコフは共に有名な映画監督であり、ロシアを代表する芸術家一族といえる。

ピョートル・コンチャロフスキーは、ロシア・アヴァンギャルドと呼ばれる動向の先導者の1人としてロシア美術史では欠かせない画家である。もっとも1920年代以降は写実に回帰し、1956年モスクワで死去するまで日本と深い交流が続いた。本論で扱うのは、風景画、静物画、肖像画などを描くようになった時代のことである。

## 新潟市美術館と埼玉県立近代美術館の作品について

当館の最初のコンチャロフスキー作品《柳の風景》〔図1〕は、1987年度に日本火災海上保険株式会社（現・損害保険ジャパン株式会社）から寄贈されたもので、残念ながら、この作品が日本にもたらされた事情や日本火災の所蔵となった経緯は不明である。所蔵作品のカードには寄贈者名として「日本火災海上保険株式会社取締役社長品川正治」とある。初めて見た時からこれは会社からの寄贈だから、代表者として社長の氏名が書かれているだけだろうと軽く考えていた。

だが、この品川正治（しながわまさじ、1924～2013）〔註2〕という人を調べ始めると、企業コレクションないし会社の備品だとしても、品川個人の嗜好が反映された、極端に言えば個人コレクションに近い性格のものではないかという思いが浮かぶようになった。もちろん、年齢からみて第二次大戦前に品川が入手したと考えることはできないので、戦前に所有していた個人から会社が受け継いだ可能性が高いと思われる。企業人でありながら労働運動にのめり込み、共産党との共闘「平和・民主・革新の日本をめざす全国の会（全国革新懇）」の代表を務めた人物なので、日露文化交流に関わった人たちと人脈があっても不思議ではないだろう。



左：〔図1〕《柳の風景》制作年不明／油彩・カンバス／73.1×95.3 cm／新潟市美術館蔵  
右：〔図2〕《ネヴァ河》1931年／油彩・カンバス／52.0×90.5 cm



左：〔図3〕《花》1928年／油彩・カンバス／39.5×48.0 cm  
右：〔図4〕《グルジア軍道》1927年／油彩・カンバス／73.0×98.5 cm／埼玉県立近代美術館蔵

ただし、美術館への寄贈に際しては、小林力三コレクションとして矢部友衛、岡本唐貴ほか、「現実会」の画家の作品253点を寄贈した小林力三（二代目、1907～2006）の仲介があったという話も伝えられている。

さて、この作品は、日本プロレタリア美術家同盟の機関誌『プロ美術』第3号（1930年1月号）の口絵に「柳の木」として図版が掲載されている。この号は「プロ美展特輯」であり、上野の東京府美術館で開催された「第2回プロレタリア美術大展覧会」の出品リストにある「柳の木」であることは間違いない。とすれば1929年以前の制作ということとは確実となる。1928年にノヴゴロドを描いた作品が多くあるので、遠景にあるのがノヴゴロドの聖ソフィア大聖堂ではないかという想像も膨らむ。この年に制作されたという可能性は捨てきれないだろう。

次に、今年度寄贈を受ける2点のコンチャロフスキー作品は《ネヴァ河》〔図2〕と《花》〔図3〕である。《ネヴァ河》はレニングラード（現サンクトペテルブルク）の風景で、中央にロストラ柱という海軍戦勝記念碑、左側に証券取引所が描かれている。《花》はコンチャロフスキーがしばしば描いたスズランかもしれないが定かではない。

これらを所蔵していた櫻井孝（1895～1971）は、大倉商事に始まり、1928年から北樺太石油、その後帝国石油に勤務した、新潟に縁の深い企業人である。他のコンチャロフスキーを所蔵した企業人については後で述べる。

国内の美術館では、埼玉県立近代美術館の《グルジア軍道》〔図4〕が挙げられる。本論とは直接関係ないが、グルジア軍道はグルジア（現ジョージア）の首都トビリシとロシア連邦北オセチア共和国の首都ウラジカフカスを結ぶ南北全長約210kmの道。19世紀初頭に、カルトゥリ・カヘティ王国が、ロシア帝国の庇護を受けたことによりこの道路の建設が始まる。その後、この道はロシアの作家プーシキンやレールモントフの『現代の英雄』などの舞台ともなった。

本作は「コンチャルスキー（原文ママ）作 風景」として『造型美術』2巻7号（1929年3月号）の口絵に図版が掲載され、もう1点とともに「2月10日の『作品批判討論会』に依ってすっかり有名になつて了つた。」と岡本唐貴が

記している。また、ニュース欄には「造型、絵画作品批判会 2月10日（1929年）造型本部において開催さる。——造型ではソビエトロシアの作家、マシコフ、ファリック、コンチャルスキー、その他内外有名なる美術作品及び、造型協会員の批判会を開催した」とあり、《グルジア軍道》がここに展示された。また、秋田雨雀の日記によれば、同年の6月9日にも「造型美術研究所のカンチャロフスキー（原文ママ）、マシコフの批評会へ行く。」〔註3〕とあるが、この日どの作品が展示されたかは定かでない。

## 戦前のコンチャロフスキーが出品された主な展覧会

まず、戦前の日本で重要な展覧会であり、ソ連からの出品作388点（目録の番号によれば）で構成された「新ロシア美術展」1927年がある。〔註4〕〔図5〕目録によれば、コンチャロフスキーは8点出品された。その中で「ノウゴロツド人」は展覧会全点中最も高い5000円の売値が付いている。〔註5〕8点中、日本で買われた作品についてはまだ調べがつかっていない。

本論にとって重要な展覧会が、「第2回プロレタリア美術大展覧会」（1929年12月1日～15日、東京府美術館）である。〔図6〕

1929年「第2回プロ美展」特別出品の「ソヴェットロシア繪畫」のコンチャロフスキー10点は、「グルジョア軍道」、「横井氏の像」、「柳の木」、「カスペックの山」、「伊太利の海」、「寺の繪」、「風景A」、「風景B」、「静物」、「デッサン四點」。この「グルジョア軍道」が、埼玉県立近代美術館の《グルジア軍道》である。この作品を画家本人から入手したのが横井半三郎で、「横井氏の像」のモデルでもある。横井半三郎（1883-1945）は王子製紙参与。愛知県に生まれ、慶應義塾卒業後王子製紙に入社、日露木材取締役などを務めた。号を夜雨といい、益田鈍翁に私淑した茶人で、茶会記の研究及び古陶の研究家としても知られる。〔註6〕

この作品に関連して、横井半三郎から満州国初代総務長官の駒井徳三に宛てた手紙がある。そこには「小生訪露中親しく交際せし同国最高画壇の元老ピーター・コンチャロフスキー氏描写高架索（コーカサス）軍道油絵一葉献上いたし」とあり、本作が駒井徳三の所蔵となったことがわかる。



左：〔図5〕『1927 新ロシア美術展覧会 目録』大阪会場の目録  
右：〔図6〕「第2回プロレタリア美術大展覧会」ポスター

戦前のロシアと日本の深い芸術文化交流の中心にいたのが、村上市出身の画家、矢部友衛である。1927年の「新ロシア美術展」の出品交渉のため、矢部は1926年7月にロシアに向けて旅立つ。翌年3月までの滞在期間中、共にフランスで学んだコンチャロフスキーと矢部は意気投合し、矢部をモデルにした絵も描かれた。矢部の文章に、臨場感あふれるコンチャロフスキーの描写がある。

「室も画室とそれにつづいた五坪ばかりの室と、小さいキッチンとそのとなりに小さい便所があるきり。入口のところについ立がはりの巾一尺五寸横一間半の箱が立つてゐる。その裏は外套かけ内側は四季の着物靴などを入れる場所になつてゐる、世帯道具はそれだけであと机と椅子があるきりである。」「製作中に誰か、ピアノを引

くと氏も足ふみ口笛ではしやぎ出す。丸で遊び半分描いている様だが、それでみてモデルには実に忠実で、只一つのタッチでもゆるがせにしない、鼻のタッチ一つに三晩考へ続けたり、一つのタッチにとてつもなくイノのがはいつたと云って、製作中に飛上がつて喜んだりする。そんな時まるで子供をそのままに大きくした巨漢の様だと思はせる。」

(「コンチャロフスキー及マシコフに就て」『造型美術』1巻1号、1928年4月号)

コンチャロフスキーの絵画は、画家ばかりでなく企業人にも愛され、プロレタリア美術運動の指針とされたが、次第に弾圧も強くなり、矢部が委員長を務めた「プロレタリア美術家同盟」は1934年に解散することになる。

## 1950年代のコンチャロフスキーが出品された主な展覧会

まず、1952年3月17日～22日、日本橋丸善画廊にて「ペ・ペ・コンチャロフスキイ絵画展覧会」〔図7〕が開催された。この目録には出品リストがないが、日本美術会発行の『美術運動』4月1日号の黒田辰男による紹介記事では、「油画24点、水彩1点、デッサン数点」、「21年から34年に至る期間のかれの作品」とある。〔註7〕

「コンチャロフスキイ愛好者の会」の名義で送られた「コンチャロフスキイ絵画展覧会御案内」にある趣旨文には注目すべき記述がある。「このコンチャロフスキイの芸術が、ソヴェート連邦に滞在したわが国の朝野の人々に深い威銘を与え、その作品が40余点もわが国に持ち帰られた」、「すぐる戦争の惨禍によって、わが国にあったコンチャロフスキイのこれらの作品は、その半ばを失った」という記載から戦前には40点以上が国内で所蔵され、その半数が戦禍を免れたことがわかる。つまり、この丸善画廊展の出品作がそのほぼ全てと想像できるだろう。

この「御案内」には丸善画廊展の発起人と賛助員の一覧がある。発起人として名前があるのが27名。その中から画家を挙げてみると、市村三男三(いちむらみおぞう)、別府貫一郎、岡本唐貴、高見耿太郎、高森捷三(たかもりかつぞう)、鶴田吾郎、内田巖、山上嘉吉(やまかみかきち)、矢部友衛、正宗得三郎、小西謙三、木下義謙、新海覚雄という13名。一瞥して春陽会、一水会などの穏健な画家が多いことが分かるが、これはコンチャロフスキーの画風が初期のアヴァンギャルドからリアリズムに移行していることからくるのだろう。また、戦前から矢部、岡本と交流があり、1947年に彼らが結成した「現実会」の主要メンバーといえる市村、高森、山上がいることから、日本のプロレタリア絵画運動とコンチャロフスキーの深い繋がりが戦後まで失われていないことがわかる。

発起人の中に河原崎長十郎の名がある。共産党の信奉者であった河原崎長十郎〔註8〕は、二代目市川左團次一座がモスクワとレニングラードで行った歌舞伎公演「織田信長」にも同行している。1927年1月9日レニングラードのアカデミー・ドラマ劇場で上演された。この歌舞伎は岡本綺堂「増補信長記」をロシア語に翻訳した演目である。

そのほかの発起人の多くは、本論の主題であるコンチャロフスキーの所蔵者であり、1956年8月1日～9日に日本橋白木屋で行われた「ロシヤ美術展」(主催:読売新聞社)の出品者である。白木屋の展覧会のパンフレットには、作品名と出品者名も記載されているのでここからはこの資料をもとにしたい。

コンチャロフスキーの出品者は、新聞記者、評論家、企業人と大別できるが、まず新聞記者から見ていこう。

### 新聞記者

「大阪毎日新聞」の黒田乙吉(1888～1971)。黒田には『悩める露西亞』(弘道館、1920)など多数の著書・翻訳書がある。デッサン2点を出品している。

大竹博吉(1890～1958)は「東京日日新聞」から「読売新聞」に移り、外務省内部用『東方通信』のモスクワ特派員も務めた。1931年にソ連図書輸入商社ナウカ社を創設した。著書に『ソヴェト・ロシアの實相を語る』(平凡社、1933)など多くの著書、翻訳がある。「リンゴ」〔図8〕と「レモンとコップ」を出品。

丸山政男(1900～1988)は「東京朝日新聞」の記者でモスクワ特派員、著書に『ソヴェートの印象』(羽田書店、1948)などがある。「雪のモスクワ郊外」を出品。

**馬場秀夫** (1901~1979)。東京外国語学校ロシア語科卒業後、「東京日日新聞」モスクワ特派員となり、「毎日新聞社」ロシア課長を務めた。その後、政治家となり鴻巣町長、行田市長などを歴任した。著書に『ソ聯の底力』（新正堂、1943）がある。「静物」と「静物」を出品。

### 評論家、公務員、政治家

**米川正夫** (1891~1965)。ロシア文学の翻訳家として著名で、著書に『ソヴェート紀行』（角川書店、1954）がある。出品したのは「アブラムツェフの秋の森」。1925年3月、「日露芸術協会」を設立した1人。設立時の他の発起人は、秋田雨雀、小山内薫、尾瀬敬止、太田黒元雄、澤青鳥、茂森唯土、昇曙夢、土方與志、村山知義、山田耕作。

在北樺太亜港総領事、**緒方整肅**〔註9〕。生没年などは不明だが、東京外国語学校を1903年に卒業したという記事がある。「風景（リング畑）」を出品。

貴族院議員を務めた**橋本実斐**（はしもとさねあや、1891~1976）が出品したのは、「橋本氏肖像」なので、おそらく本人の肖像だろうが、父親の橋本実穎（さねひで、1867~1931）の可能性もなくはない。実斐はロシアよりもフランスとの縁が深く、レジオンドヌール勲章を受章している。

3点出品している**川谷弘**は、確証はないが、1952年の丸善画廊の案内状では、賛助人として名前があるモスクワ大使館商務書記官だった川谷幸左衛門（かわやこうざえもん）の親族と推測できる。幸左衛門には『シベリアト中央亜細亜』（1939）という講演録がある。出品されたのは「すずらん」「スケート場風景」「バラ」。

1929年創業の千倉書房が2点あるが、創業社長の**千倉豊**（1893~1953）の所蔵していたものだろうか。この時期、豊が亡くなっているため、社長を引き継いだ夫人の**千倉悦子**が出品したと考えられる。「洪水」「寺院」〔図9〕。

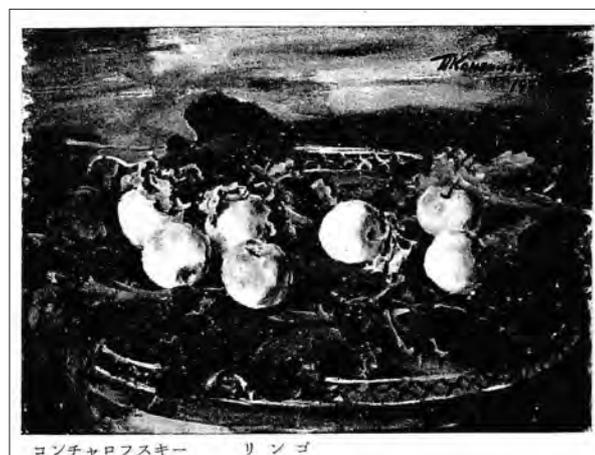
**新谷壽三**（にいやとしぞう）は、丸善画廊展の発起人の1人だが、詳しいことはわからない。同名の人物には、北樺太の油田に関する論文などがある地質学者がいる。出品したのは「新谷氏肖像」。

### 企業人

**横井半三郎**（夜雨、1883~1945）はすでに亡くなっているため、夫人の**鎮**が出品したのは「第2回プロ美展」にも出した《横井氏肖像》である。

**櫻井孝**（1895~1971）。寄贈された《ネヴァ河》には白木屋展の出品票が付属しているが、リストにないので、「風景」とあるのが《ネヴァ河》と推測できる。また今回寄贈を受ける3点中のヴァシーリー・ポレーノフВасилий дмитриевич Поленов（1844~1927）《コーカサス》〔図10〕も出品されている。

脇道にそれるが、イリヤ・マシュコフИлья Иванович Машков（1881~1944）の所蔵者としてしばしば名前の現れる**梅浦健吉**は白木屋展に出品はしていないが、紹介しておきたい。大倉銃砲店に勤め、1918年から1921年まで東洋パルプ取締役、1919年鴨緑江製紙を大倉喜八郎らと設立した。大倉組の参与から東洋モスリンの専務となる。櫻井孝とよく似た経歴といえるだろう。著書に『ソウエート・ロシアの社会保険』（巖松堂書店、1928）がある。〔註10〕



左：〔図7〕「ペ・ペ・コンチャローフスキイ絵画展覧会」目録  
 中：〔図8〕「リンゴ」「ロシア美術展」目録より  
 右：〔図9〕「寺院」「ロシア美術展」目録より

『アトリエ』7巻9号(1930年9月号)の「プロレタリア美術の口絵解説」で矢部友衛はこのように記している。

「一、コンチャロフスキーの風景は、最近横井半三郎氏の手もと迄送り届けられたもので、二三年この方の作品らしい。」

「二、マシユコフの魚は、廿六年に滞露中の梅浦健吉氏が氏のアトリエで手に入れたもので、多分二十四五年頃の作品と思へる」

本論は覚書なので結論というものはないが、戦前の日本とロシアは強い文化交流を結び、画家や文化人だけでなく、新聞記者や公務員、政治家もその交流の中でロシア画家の作品を収集していた。とくに大陸に工場や関連会社のある企業人の所蔵家の多くが、同時代のロシア画家と交流し、直接入手、所蔵している点は特筆すべきだろう。



〔図10〕 ヴァシーリー・ポレーノフ《コーカサス》制作年不詳／油彩・カンバス／12.5×18.5 cm

〔註1〕 ミハイル・ペトロヴィッチ・コンチャロフスキーの作品は、《高井義喜久像》1932年が北海道立函館美術館に所蔵されている。

〔註2〕 品川正治『戦後歷程—平和憲法を持つ国の経済人として』岩波書店、2013年

〔註3〕 『秋田雨雀日記』第2巻、未来社、1965年、153頁

〔註4〕 会場は、東京朝日新聞社（5月18日～31日）、大阪朝日会館（6月16日～29日）、愛知県商工陳列所（7月3日～7日）

〔註5〕 目録には「注意 価格は関税（6割）を加算してありません」とある。

〔註6〕 ロシア関係の著書に『露西亜の輪廓』王友社、1928年、『ろしや歌日記』私家版、1928年がある。

〔註7〕 黒田辰男「ペ・ペ・コンチャロフスキーの繪画藝術の意義」、『美術運動』1952年4月1日号

〔註8〕 太田丈太郎『「ロシア・モダニズム」を生きる』成文社、2014年 河原崎長十郎が所属する前進座は共産党に集団入党したが、1967年に除名されている。

〔註9〕 亜港は現在のアレクサンドロフスク・サハリンスキー。1890年にはアントン・チャーホフが訪れ『サハリン島』を著した。

〔註10〕 「面喰らわした穴会社 今や羊毛界に君臨 大洋モスを築く梅浦君」、『時事新報』1933年12月6日

#### 〔参考文献〕

山田清三郎『プロレタリア文化の青春像』新日本出版社、1983年

五十殿利治『大正期新興美術運動の研究』スカイドア、1998年（改訂新版）

富田武『日本人記者の親た赤いロシア』岩波現代全書、2017年

#### 〔謝辞〕

櫻井路子氏からご提供いただいた資料類を大変参考にさせていただきました。心から御礼申し上げます。

（まえやま・ゆうじ 新潟市美術館 特任館長）

本誌のPDF版を、新潟市美術館WEBサイト「刊行物」のページにて公開しています。  
本誌挿図は全て一色刷ですが、今号のPDF版は多くを原色で掲載します。

<https://www.ncam.jp/>

**新潟市美術館・新潟市新津美術館研究紀要 第10号（令和6年度）**

Bulletin of Niigata City Art Museum & Niitsu Art Museum, No.10

発行日／2025年3月31日

発行／新潟市美術館

〒951-8556 新潟市中央区西大畑町5191-9

TEL:025-223-1622

FAX:025-228-3051

編集／新潟市美術館

印刷／株式会社ウィザップ

ISSN 2187-6770